非暴力平和隊・日本(NPJ) ニューズレター

第43号　　2012年6月01日発行

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 1 階 A 室
Tel:080-6747-4157 E-mail:npj@peace.biglobe.ne.jp
Fax: 03-3255-5910 Website:http://np-japan.org/

Nonviolent Peaceforce Japan Newsletter

・南スーダンにおける非暴力平和隊の活動　岡田 二朗　2
・【翻訳記事】Christian Science Monitor Apr.6, 2012　林 恵理奈訳　8
・遠くへつなぐ支援の道　南スーダンに向けた枠組みの模索
　南スーダン「スポーツの力」プロジェクト　引地 達也　10
・東北アジア平和構築インスティテュート(NARPI)　奥本 京子　13
・暴力の副作用を防ごう　安藤 博　14
・南スーダンの平和憲法　君島 東彦　15
・足尾からフクシマへ　大畑 豊　16
・2012年度活動方針(総会記録)　17
・2012年度予算について　大橋 祐治　18
・2012年度予算　19
・会員募集／夏季カンパのお願い　20

南スーダン NPの移動車の中から撮った写真。前方を走るのは国連の車である。(岡田二朗)

南スーダンにおける非暴力平和隊の活動
―大学生の見た「非武装の平和維持活動」の最前線

岡田二朗（立命館大学国際関係学部 4 回生）

はじめに―新国家におけるP活動の最前線へ

航空機からジュバの空港に降り立った瞬間の暑さと強烈な日差しが今でも印象に残る。2012年4月23日の朝に日本を発ち、香港・バンコクを経由した後にエチオピアの首都アディスアベバにて数日間の滞在。在エチオピア南スーダン共和国大使館にてビザを取得し、同月26 日に空路で南スーダンの首都ジュバへと到着した。平屋建ての空港の建物に入り、小さな教室ほどの大きさしかない建物に不釣り合いなほど多くの到着客がひしめきあう中からなんとか自分の荷物を探し出し、青いミリタリー柄の制服を着た係員の立つ入国審査へ向かう。この国に来た理由はとあるNGOを訪ねるためであると、非暴力平和隊からの紹介状を見せながら説明すると、係員は快く私を「世界で最も新しい国」へと迎え入れてくれた。そして空港を出るとそこには“Nonviolent Peaceforce”と大きく書かれたロゴ入りのボードを持った2人のスタッフが私を待っていてくれたのであった。

本報告は 4 月 23 日から 5 月 8 日の帰国まで、現在大学4回生である私が実際に訪ねることで見えた南スーダン共和国での非暴力平和隊の活動とそこから感じ考えたことについてまとめたものである。

1　首都ジュバにて―インターナショナルとナショナルの出会い

（1） NPの事務所に到着して

今回の南スーダンNPの訪問において私が滞在した場所は2つの町である。1つ目は南スーダン共和国の首都であるジュバ(Juba)。そしてもう1つはそこから車で4時間程走った先にあるレイクス州(Lakes State)にある町、イロル(Yirol)である。

最初の数日間にあたるジュバでの滞在中はNPの事務所の一室を借りて寝泊まりさせていただきながらジュバでの仕事を見せていただいた。事務所は空港から車で 20 分ほどの町中に位置し、決して地元の人びとから遠く離れた場所ではなく、むしろコミュニティの中に位置しているように感じられた。私がジュバに到着した際には、南スーダンチーム責任者のティファニーさんやジュバ市内で展開しているチームのスタッフはもちろんのこと、東部のジョングレイ(Jonglei)のチームへの合流準備をしていたスタッフたちや、さらにはNP本部（ブリュッセル)からフィールド視察に来られていた事務局次長のキムさんともお会いすることができた。

カナダ・オランダ・韓国・スリランカ・ウガンダなどの多様な国々から集まったインターナショナルスタッフ、地元の南スーダン出身のナショナルスタッフ、そしてケニアやエチオピア出身の車の運転専門のスタッフ。NPは「北の(先進国の)人間が南を一方的に助ける」といった構図を避けることを強く意識していると事前に知ってはいたが、たしかにその理念の実践を伺うことができた。また、NPの仕事においてナショナルスタッフの占める非常に重要な役割も滞在中実感した。このナショナルスタッフの大きな役割について詳しくは後述する。

スタッフの方は各々に様々な仕事があるようで、パソコンに向かって様々なデスクワークをこなしているかと思えば、ある時は町のマーケットに出てフィールドに必要なものを買いそろえに行き、またある時は他の機関との会議に出席したりもしている様子だった。地元の公共の電気はもう数ヶ月も供給が止まっているらしく、事務所の発電機の動いている時間によって仕事も制約されているらしかった（特にインターネットは電気の動いている時間帯しか使用できない）。スタッフの方々を見ていると、やるべきことに集中されている時と、リラックスされている時との切り替えの

卓越さにも感心させられた。そんな中、ジュバに滞在中の私はスタッフの方々に仕事の合間に話をきかせてもらい、買い出しや、後述する護衛的同行（Protective Accompaniment）にいっしょに連れていってもらった。

（2） 市内の様子―国際機関、政府組織、人びと

ジュバ市内の様子であるが、まずかなりの規模と数の国連機関やその他の国際機関が展開していたことが印象的である。車での（ほとんど舗装されていない道の）移動に同行させてもらっていると、必ずと言っていいほど何台もの“UN”と書かれた車とすれ違う。私は国連の車などもちろんまったく目に触れることもなく育ってきたが、ジュバにいた数日の間にはすっかりその文字を見慣れてしまった。しかし、ある国連機関職員の「援助浸けですよ」という、南スーダンの現状を表す言葉に、複雑な気持ちを感じたのも事実である。

この国連とNPの関係について南スーダンに来て抱いた印象は、私が以前日本で持っていた「互いに関わらない」イメージとはかなり違うものだった。双方の協力関係のようなものが少しだが垣間見えたからである。例えばNPのスタッフたちがフィールドに向かう際に使える移動手段は主に2つであったが、1つは南スーダンでは極めて重要な移動手段となるNPの持つ車（側面には“Funded by Japan”と日本国旗とともに書かれていた）。もう1つが長距離を移動する際に使う飛行機である。この飛行機は側面に“UN”と書かれた国連の飛行機で、予約をとって乗るとのことであった。NPスタッフの方の説明によれば、国連はリソースの上ではかなり強力な存在であり、紛争地での諸機関の中でもその役割は大きいと同時に、やはり各国政府と関わる大きな機関である分、迅速な行動の難しい時もあり、そのような時にNGOはやはり強いとのことであった（そのスタッフの方を含め数名のNPスタッフは国連職員の経験者である）。

もうひとつ例をあげると、東部のジョングレイは、状勢上まず女性や子どもへの護衛が優先的に必要なので他の機関よりもNPの活動が適していると判断されている。そのため、フィールドチーム展開のために国連やUNHCRからの資金面でのサポートもあるとのことだった。

私の渡航時期は、ちょうど南スーダン北部国境沿いの産油地域周辺にスーダン軍が空爆をしかけていた時期であったのだが、首都ジュバも、その後合流させてもらったフィールドチームの展開するイロルも、この紛争が直接影響を及ぼしている様子はなかった。

しかし、南スーダンでのNPの活動に少なからず影響を及ぼすものとして、南スーダン政府軍であるSPLA（スーダン人民解放軍）の存在はあった。このSPLAとは南スーダン独立に大きく貢献した元々の反体制派組織であり、独立後も強い影響力を持ったまま南スーダンの広域に存在しているようである。例えばこれは誰にでも当てはまることだが、ジュバのようにSPLAがいたるところにいる場所では、写真の撮影はスパイ活動と疑われるためほとんど常に不可能であった。しかし、様々なアクターが存在する中で、「政治的に特定の立場に立たないこと（non-partisanship）」を原則の1つとして活動するNPと、このSPLAや警察との関係は決して悪くはないようであった。

また、ジュバはやはり首都だけあって人の量も交通量も多かった。公用語は英語のはずだが、人びとの間ではアラビア語に近い言語が話されていた。そして私たちのような外国人はやはり目立つらしかった。事務所の外に一歩出ると、かなり露骨な視線を感じながら町を歩くことになる。「カワジャー！」と呼びかけられることも多々である。この「カワジャ」という単語は現地の語で「白いヤツ」という意味だときいた。南スーダンでは私のような東アジア顔の人間も「白い」のである。

これがいったいどのような意味を持つのかについては後述するフィールドにおいて理解することとなった。

（3） 病院での護衛的同行

ジュバにはNP南スーダンチームの中心的な事務所があるだけでなく、ジュバ市内を担当するフィールドチームも展開している。彼らは市内でいくつかの活動を行っているが、そのうちの1つであるジュバ市内の病院に入院する2人の少年患者への護衛的同行に私も同行させてもらった。この護衛的同行とは自分の身に暴力が迫っているとNPに護衛の要請をした人（この場合はこの2人の少年）のもとにNPのプレゼンス（存在）を提供するというもので、護衛といっても当然ながら非武装で行う。

インターナショナルスタッフと地元のナショナルスタッフがペアになり、24 時間体制でシフトを組んでそこにプレゼンスを与え続ける。言い換えると、付き添い続けるということである。そしてこのプレゼンスによって不当な人権侵害や暴力に対して「国際社会の目」が見ていることを表し、暴力を抑止するというものである。この仕事は一見地味でありながらその実態は極めてタフなものである。「何も起こらない」ことのためにそこにプレゼンスを提供するのだが、当然ながら「何か」が起こる可能性も常に拭えない。そのような状況下で、ただそこにプレゼンスを提供し続ける。つまり地道に付き添い続ける。夜のシフトに入るスタッフなどはかなりの疲労を感じているようだった。しかし病院でも感じたことだが、やはりNPの存在感はかなり大きい。「白い」外国人はあまりにも目立つ。そして私たち「白い」外国人といっしょにNPの制服を着ているナショナルスタッフもやはり目立つ。そして病院にいながらにしてとてつもない「よそ者」の感覚を自分が感じたのも事実である。少し複雑ではあるのだが、ある意味でこれは南スーダンの土地だからこそ生まれるNPの活動への肯定的な効果なのではないか、などと考えた。

しかし、実はその護衛的同行をした数日後に「（入院患者だった）少年が連れ去られた」との連絡が入った。少年の1人は、足に銃で撃ち抜かれた傷があった。スタッフの方に聞いたところ、その傷は少年が非常に若い年齢で「何らかの理由」により投獄され、後にある国際機関の助力で釈放された後に、その少年のもとに再びやってきた警察官に撃たれて負ったものだと知った。そして今回少年を病院から連れていったのも警察だったようである。その逮捕の「何らかの理由」とは少年が少し政治的に複雑な立場にいたことらしい。だが、NPはその人の政治的立場に関わらない範囲で、要請があれば護衛を提供するのが原則。また、少年を連れて行くことを体をはって止めるなどといったこともできない。この件については自分の中での葛藤を感じずにはいられなかった。

2 イロルにて―フィールドでの活動

（1） イロルの町とフィールドチーム

渡航前にNPスタッフの方と連絡を取り合っていた頃にいただいた返事の中にこのような一文があった。「あなたには南スーダンでの多くの時間を、実際に私たちが展開しているフィールドで過ごしてもらうことになるわ。そこがあなたにとってこの国での最も大きな学びの場になるはずだから」

首都ジュバで数日間を過ごした後、車で出発し約4時間。舗装などされていない、砂埃で何度も視界の真っ白になるような道を、時たま遭遇する牛の大群（この牛が南スーダンでは非常に重要な存在となるのだが）を連れた人びとをよけながら進む。そうしてレイクス州にあるイロルの町に展開するフィールドチームと合流したのである。

車にいっしょに乗っていたナショナルスタッフのロッキーが “Jiro. Welcome to Yirol Town!” と寝ている私を起こしてくれたので周りを見渡

伝統的な家屋の並ぶイロルの町。手前はNPスタッフ

すと、車はあたり一面に散らばる南スーダンの伝統的な円錐形の茅葺き屋根つくりの家屋の間を走り抜けているところだった。そのコミュニティの中心地のようなところにレイクス・チームの事務所はあった。いくつもロッジのようなものが集合しているところを借りて事務所と生活空間にしているらしい。そこでのチームリーダーは、元NPスリランカ・プロジェクトのスタッフだったスリランカ人のアジャンで、その他のインターナショナルスタッフはカナダ人のアシュリンとインド人のアーシャだった。

事務所につくとまず、近くのマーケットに買い物に行くロッキーについて少し町を歩いた。町中から、ジュバとは比にならないほど多く、かつ露骨な「珍しいものを見る」視線が自分に降り注いでいるのを感じた。町では「白い」外国人はよほど珍しい存在らしかった。だが、特に敵意をもった目ではなく、あいさつもしてくれた。試しに少し覚えた地元の言葉を一言二言使ってみるとさらに珍しい目で見られた(心なしか友好的な目だったが)。この数分間の町の様子見で、このイロルでもNPの発揮し得る強烈なプレゼンスを理解したのは言うまでもない。

私のこのイロル滞在中の数日間に、町では3件の衝突が起こった。1つは2人の女性の水の使用に端を発した件、2つ目はほんの小さな諍いから拡大して死傷者まで出てしまった件、3つ目は土地をめぐった争いである。本報告では最初の2件に絞って述べることにする。

（2）「中立」の難しさ

イロル到着からほんの 30 分後、事務所に連絡があった。「デイビジョン6で争いが起こっているらしい」と、インターナショナルスタッフのアシュリンに言われ、チームリーダーのアジャンに渡されたNPのポロシャツを着ると、すぐさまスタッフたちといっしょに車に乗せてもらい現場へと急行した。現場に着くとどうやら騒ぎはもうおさまっていたらしく、たまたま現場に居合わせて事務所に連絡をくれたナショナルスタッフのスーザンがチームに事態の説明を始めた。

するとNPの車と私たちの周りに、たくさんの子どもたちが集まってきた。きっと外国人もNPも珍しく、好奇心を持ったからだろうか。集まってくる子どもたちのおかげであっという間に目立つ人だかりになってしまう。すると大人たちも近づいてきて、さらにはミリタリーの関係者も何事かと近寄ってきて、私たちNPに対して猛烈にいろいろと言ってきた。どうやら私たちが警察及びミリタリーがとった鎮圧行動に対して批判をしていると勘違いされたらしい。その場にいたのは私とアシュリン、アジャンとロッキーそしてスーザンの5人。リーダーのアジャンが冷静に説明しようとしていたが、相手はかなり興奮していて英語や現地語で様々なことを言ってきた。ほとんど何を言われたのかわからなかったが、私に向かって「非武装のオマエたちがいったい何をしようっていうんだ！」と言われたことだけは覚えている。まさか非暴力的介入を試みる自分たちが別の方向から介入していた公権力と衝突するとは思いもしなかった。アジャンがその場はできる限りの説明をしたが、ひとまずスタッフ全員で車に乗ってそこから離れたところで話し合うことになった。

そもそもの衝突の発端は、水の使用について2人の女性が口論になり、そこに周りから互いのコミュニティの女性たちが加わって拡大し、互いに石を投げ合うような暴力的な争いに発展した、ということらしい。そこにNPよりも先に警察やミリタリーが到着し、争っている両コミュニティ

の女性たちをなぐったりして(“beat”と言っていた)事態を鎮圧したようだった。そして、それについてNPが悪く言ったと勘違いされたというのが先ほどの論争の原因とのことだった。そのまま私たちは町の有力者であり政府関係機関の地域的なリーダーであるコミッショナーのもとに向かい、事態についての説明を行った。政府のコミッショナーは、「NPはこの国の人びとのために働いてくれている」とNPを高く評価し要請してくれていて、フィールドチームにとってもかなり重要な存在であるようだった。説明が済むとひとまず事務所や家に帰ることになったのだが、その後にまた事態は急変したのである。

事務所に戻って少しリラックスしていると、リーダーのアジャンがスタッフに集合をかけた。先ほど私たちに事態の説明をしてくれていたナショナルスタッフのスーザンが、家にきた警察に捕まったとの連絡だった。治安当局はNPが自分たちを非難していると勘違いしたままだったようである。アジャンがロッキーとともに警察のもとに事情を説明しに急行したが、アシュリンと私は、「相手は私たちNP(特に「白い」私とアシュリン)を呼んだことに対してかなり過敏になっている。私たち2人は今外に出ると捕まりかねない」とのことで事務所にて待機することになった。その間に他のナショナルスタッフのアブラハム、コン、アボリッシュの3人も事務所にやってきてそれぞれ町の様子や状況を伝えた。結果としては、リーダーのアジャンが説明に奔走し、コミッショナーが釈放命令を警察に出したため、誤解も解けた状態でスタッフは釈放されたのだが、この一件で私は「介入」というものについて考えさせられた。地元の公権力による武力介入とNGOによる非暴力的介入。そして「中立性」を顕示しないと自分たちにも危険が及ぶということ。その中立性は地元の人びととの関係の中で築いていかなければならないということ。フィールド初日にしてあまりにも様々なことを感じることになった。

（3）「紛争地」という現実に直面して

イロル滞在3日目の朝のことである。まだずいぶん早い時間に何発も「パーン！」という音が少し離れたところから聞こえて目が覚めた。このときはあまり何のことかよくわかっていなかったのだが、しばらく経ってからチームリーダーのアジャンが「二朗、今朝の銃声を聞いたか。銃撃戦があって3人が死んだ。これは放っておくとさらに大きな紛争に拡大する可能性がある」と私に伝えてくれて、ことの重大さを知ることになった。発端は数日前に店のテレビでサッカーの試合を町で見ていた人びとの間で起こったいさかいで、それにたまたまコミュニティをまたいだ別の村の人間が関わってしまったために親族や各コミュニティの人間を巻き込む報復の応酬となったとのことだった。そしてそれが最も激しく暴力化かつ顕在化したのがその朝の銃撃戦だったというのだ。NPはこの件のこれ以上の暴力の拡大を防ぎ当事者たちの対話のための空間を創出するためにコミットすることとなった。

その地域には伝統的な和解の手法があるらしい。「牛」を使ったもので、例えば殺人の罪に対しては加害者の一族が被害者の一族に何頭の牛を渡すといったものである。残念ながら私はこの和解の成される時まで滞在はできなかったのだが、たしかにそこには伝統的な和解のための形が存在するようである。しかし、問題となったのが人びとの間に共有されるもう1つの「伝統」である。それはその日何度も聞いた言葉である“revenge”,“retaliation”つまり「復讐」である。ナショナルスタッフたちが特に説明してくれたのだが、この地域では誰か家族やコミュニティの一員が何者かに攻撃されると必ずやり返さなければいけない、そう信じられているらしい。これがどれほどの範囲とどれほどの強さで慣習化されているのかはあまり定かではないが、滞在中に起きた事件から見ると、たとえその犯人が捕まってもその親族まで復讐の牙が向け

られるということは十分に理解できた。ナショナルスタッフのロッキーが私に「ここでは問題の解決方法は新たな問題をつくることだ。暴力を暴力で解決しようとする」と言っていたことが印象に残る。伝統的な和解の方法があっても、それまでに復讐の応酬になる場合、また和解の済んだ後にも復讐の起こる場合もあるらしい。この復讐の連鎖によってどこまでも暴力の拡大し得る「不安定さ」。これが紛争影響地というものなのかとその時感じた。

フィールドチームはまず、ナショナルスタッフを中心に情報を集めそれから何人かに別れて病院や政府の関係者、被害者のコミュニティなどに向かった。町を通るとマーケットはすべてシャッターの降りた状態で、初めてイロルの町に到着した時とは明らかに様子も違っていた。私は被害者のコミュニティの1つにアシュリン、スーザンに同行して向かった。そこを訪れた目的は、そのコミュニティからの報復をできるだけ抑止するということだった。特に葬儀の後などは集団内に報復の気運が高まるため、そこにNPのプレゼンスを提供することで暴力をおさえる。またそこのコミュニティのリーダーが平和的な解決を望んでいる場合などにもNPのプレゼンスは（例えば対話を望む場合に相手の領地内まで護衛的同行を提供する）効力を発揮するとのことだった。そこでコミュニティの場所を訪れたのだが、その時ちょうど、葬儀が執り行われている最中だった。

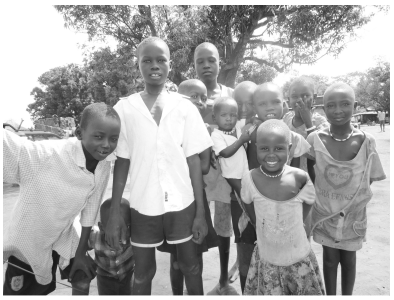
私たちは葬儀から少し離れたところに立っていたのだが、離れていても伝わってくるその葬儀の様子はまさに紛争地の「現実」を十分すぎるほど私に感じさせるものだった。強烈だった。すさまじかった。強烈な悲しみがそこにはあって、また強烈な怒りもわきおこるであろうことも自分には否定できなかった。どうして相手を憎まないでいられるだろうか。そう思っている自分がそこにはいて、またその場に自分たちがいることが本当に正しいのかわからなくなったのも事実である。様々な激しい矛盾や葛藤を感じながらそこに立っていた。

後日、本部から来ていたキムさんにこのことを話した。キムさんは「NPだけですべての紛争が解決するわけでないのは明らかだし、NPにできないことがたくさんあるということも理解している。でも、『自分たちにもできることがあるなら』 そう考えて手探りでも動き続けている」と言っていた。地道であり、厳しい世界だと思った。でもやめるとそこですべて終わってしまうとも感じた。模索し続けないと、と今はただ強く感じる。

おわりに―よそ者でありながらも
その地の人びとと歩む

イロルの町は、首都から離れた田舎町であるため人びとの間での情報の伝わり方というのも少し特徴的であった。まず町のすべての人がテレビを持っているわけではないし、インターネットなどもないためNPのスタッフさえも使えなかった。ラジオを持っている人は何人かいるが、ナショナルスタッフのロッキーによれば、このイロルで起こったことはテレビにはおろかラジオでもほとんど取り扱われることはない。メディアとなるのは、地元の人びと自身ということになる。そのような状況下で迅速に正確な情報を入手するのは決して容易ではない。私たち外国人にとっては特にである。

そこで大きな役割を果たすのが、地元出身のナショナルスタッフである。何か起こった際の町の人びとの様子やその間で何がウワサ


イロルの事務所の前で出会った地元の子どもたち

されているかなどは彼らが集める情報が非常に頼りになった。地元の言語のみを話す人との通訳もできる彼らは、NPという外からやってきた集団をいかに地元コミュニティに近いものにできるかという点でカギとなっている。彼らナショナルスタッフたちの持つバックグラウンドも多様で、紛争に巻き込まれた村の出身者から政府の元役人まで様々だ。そして誰もが高いモチベーションを持って働いている。NPの仕事はこのナショナルスタッフの力なしには絶対に成り立たないだろうと思う。

この活動においては、外国人が外から「正義」や「平和」を無理に押し付けたりするようなことはしない。その主体は常にその地の人びとでないといけなくて、外からやってきた私たちの仕事は彼らが平和をつくるための空間をつくることである。その点からも、NPは地元のコミュニティとの関係性の中に生きることを必要とされる活動ではないかと私は感じた。「国際社会の目」を持ってくるよそ者でありながら、その地の人びととの関係の中に生きる。これは言葉で理解していても実際は決して容易でないと現地で感じた。

自分はそこでは外国人であり、白い人間であり、よそ者であった。しかし同時に、その地域の人びととの信頼関係の中で働かなければいけない。これは大きな挑戦だと感じた。だがこれはNPであるからこそ、非武装の市民NGOであるからこそ、できる挑戦のひとつではないだろうか。その活動にはまだ確実さも普遍的な効力も足りていないのかもしれない。スタッフたちもすべてはその事象ごとに対応しなければいけないと言っていた。ほんの少しの期間しかいなかった私には、まだまだ見えていない部分があったということも言える。しかし今後、この活動「非武装の市民による介入」は、その道を模索しながらも人びとのいのちを守る大きな役割をこの世界の中で担うことになるのではないだろうか。

【翻訳記事】非暴力平和隊、南スーダンの女性と子どもの保護に貢献

The Christian Science MONITOR April 6, 2012
By Gregory M. Lamb, Staff Writer

去る４月６日、米国紙クリチャン・サイエンス・モニターが、NPの南スーダンでの活動について記事を掲載しました。その新聞記事を紹介します。翻訳者は、立命館大学国際関係学部3回生の林恵里奈です。（君島）

・・

南北スーダンの対立およびジョゼフ・コニー率いる「神の抵抗軍」（LRA）は、南スーダンにおける数々の難題のうちの２つだ。南スーダンの現地の人々、特に女性と子どもを脅威から守るために、非暴力平和隊（Nonviolent Peaceforce）が活動している。

北の国境はスーダンとの武力紛争、南の国境はLRAによる襲撃―。１年前に建国されたばかりの新しい国家南スーダンは、平和を得るためにとてつもなく大きな困難に直面している。

そんな中、非暴力平和隊（本部ブリュッセル）は、南スーダンで支援活動を展開する国際NGOの中で急速に存在感を高めている。戦闘が続く、この東アフリカ“国家”の8か所を拠点に、この3年間で65名の非暴力平和隊スタッフが活動してきたのだ。

ウガンダと接する南側の国境では、LRAから逃れてきた人たち、LRAに襲撃されうる地域に住む人たちの支援をしている。

非暴力平和隊の南スーダン・プロジェクト責任者ティファニー・イーストム氏は電話取材で話す。
「LRAに誘拐された人々は何年も帰って来ていません。私たちは連れ去られた人々が家族のもとへ帰る手助けをしています」
イーストム氏はいう。
「南スーダンにおいてLRAの影響力は減退しています。LRAは今やかなり分断されていて、かつてとくらべて規模も小さく、結びつきも弱いです。現在彼らは、自らの生き残りのために、基本的には、生活必需品、主として食糧を求めて闘っているにすぎません。兵士の募集もしてはいますが、かつての規模には到底およびません」
国境付近の村への攻撃は「ほぼ予測できる」という。それは穀物の収穫の時期と重なっている。「食糧のため」に攻撃してくるからだ。

今までのところ、南スーダンの非暴力平和隊スタッフは誰ひとり捕えられたり、危害を加えられたりしていない。スタッフたちは、絶えず地域社会や現地政府の指導者たち、軍人、警察、さらには武装した畜牛飼育者たちと良い関係を築いている。
イーストム氏はこう語る。
「私たちの活動の第一のルールは、自らの安全を維持できないかぎり、他人の保護をすることはできないということです。我々は安心と安全の中で働くのです」
非暴力平和隊の任務は、敵対関係にあるグループ同士の対話を促進すること、恐怖にさらされた市民に、保護のために付き添うことで、すでにスリランカやフィリピンでも活動してきた。
南スーダンでは、スーダンと接する北の国境からほんの数マイルほどの難民キャンプに駐在している。
スーダンとの国境沿いで、紛争は確実に増加してきている、とイーストム氏はいう。
国境より南スーダン側に存在する油田の占有をめぐって「事実上の武力闘争」が勃発するだろうと考えられている。
「周辺地域での緊張状態は非常に高まっています。宣戦布告はなされていませんが、これは実際に戦争行為です。雨季が来てタンクなどの重い器具の移動が制限されるまで、６～８週間ほどは緊張状態が続くでしょう」とイーストム氏はいう。

難民キャンプでの非暴力平和隊の役割のひとつは、スーダンから国境を越えてやってきた親に連れられていない子どもたちの援助だ。教師が生徒たちを連れてスーダンを逃れる場合もあれば、子どもたちが親から離れる場合もある。
非暴力平和隊はキャンプで子どもたちを保護し、さらに彼らの身分証明書作成を手助けして一緒に家族を探す。
非暴力平和隊はまた、各世代の女性難民に対してキャンプでの生活のしかたを伝えている。その内容は、「ＳＯＳを発する方法、水を得る方法、攻撃されずに買い物に行く方法」などだという。時にはキャンプを離れ、国境からより遠くへ避難させることもある。

イーストム氏がいうには、南スーダンの現状に対する国際社会の人道主義的応答は「非常に力強い」そうである。
しかし、貧困と紛争の渦中で、しかも教育を受けていない人が人口の大半を占める中で新しい国家を築き上げる作業は非常に困難である。
「それは21世紀における石器時代とも言えるでしょう」
たとえこの地域での戦争が終結しても、すべてが解決するわけではないであろう。
イーストム氏はいう。
「平和は紛争と同じくらい複雑で入り組んでいる、これが現実なのです」

遠くへつなぐ支援の道
―南スーダンに向けた枠組みの模索

南スーダン「スポーツの力」プロジェクト代表
引地達也

東日本大震災の被災地から世界で最も新しい国、南スーダンへ―。未曾有の大災害を目の当たりにして、被災者の痛みを受け止めようと支援に動いたその行動を、今度はアフリカ大陸の真ん中に導き、展開し、つながり、そして喜び合おう、というのが、今回、私が立ち上げた南スーダンにおける「スポーツの力」プロジェクトである。

プリズンエリア

灼熱の大地、砂埃の舞う道と行き交う黒い人の群れ。南スーダンの首都ジュバの中心地は、いまだに目立った建物はない、砂上の楼閣のような街である。中心部には、竹柵で囲われて、土壁と藁の屋根で丸い家屋が居並ぶ風景が広がっていた。炭焼きの匂いと噴煙、子供の泣き声、そして笑い声。それは町に突如現れた一般化したアフリカのイメージに適った集落のようで、集落の入り口ともなる細い路地先には、つぶらな瞳が私を凝視していた。

まるで、映画で見た終戦後間もないバラックの風景である。自分が米兵にでもなったような気分だが、現実は現実で、この集落の彼らは私のような人種に会ったことがなかったのだろう。彼らは私のふさふさした黒い髪の毛を不思議そうに触っては笑っていた。

その後、彼ら子供の親たちと集落内で話をし、「この地区で子供は何人いるのか」「教育はどうなっているのか」と問いかけながら、「スポーツを通じた教育支援をしたい」と申し出ると、集落内の親の1人であるデビッドはこう言った。

「ここが何と呼ばれているか知っているか」

「もちろん、プリズン地区ですね」

当地は市街地でも開発ができないいわゆる「スラム」的な場所であり、刑務所で働く人多い、と地元では言われているが、その職が下流に位置すると彼は説明してくれた。そして、私はデビッドを見据え、こう言った。

「だから、やって来た」

そういうと、デビッドは微笑み、握手を求めながら、こういった。

「お前はいいやつだ」

世界最新の国

今回、私は南スーダンに対する民間支援の枠組みを作るための事前調査として現地入りした。荒廃した国を「つくる」支援という名の挑戦。挑戦の狼煙を示す前に、南スーダンの歴史を振り返りたい。

2011 年 7 月 9 日、アフリカの 54 番目の国家として、大陸中央に位置するスーダンから南部 10 州が分離独立して南スーダン共和国が誕生した。

同大陸で最も広大な面積を持っていたスーダンは、内部にアラブ系（北部）と黒人系（南部）を抱え、イスラム教とキリスト教、各部族間のほか、時の軍事政権の様相などにより 1955 年以来、内戦に次ぐ内戦で国難を極めた。

内戦の中心はアラブ系で占められる北部と非アラブ系の南部間であり、そこに北部によるイスラム教の拡大に対する非アラブ系の反発や、豊富な石油資源をめぐる対立などが背景にあるが、国難の末の妥協点として、2005 年にスーダン政府と反政府の黒人組織である「スーダン人民解放軍・運動」（SPLA/M）が包括和平協定を調印、最終的には南側の独立はその内戦終結の帰結点であると国連はじめ西側の各国は考え、国際社会が住民投票というプロセスを後押しし、独立を達成させる形となった。

続く混乱

しかし、混乱は収まっていない。

政府間の対立とは別次元であると指摘されるものの、2006 年に国連が「世界最悪の人道危機」とし、安保理が最大 3 万人規模の平和維持軍を派遣したダルフール紛争は、スーダン西部に位置する面積約 49 万キロメートルの地域での、非アラブ系住民対する民族浄化の名のもとでの大量虐殺である。ダルフールだけではなく、部族間の争いによる衝突は、かつては羊飼いのテリトリーをめぐる刃物での「小競り合い」であったが、今では刃物が銃器に変わり、「戦闘」は激化、多大な犠牲者を数える悲劇となっている。

私が現地入りした 3 月初めには北側から国境地帯への爆撃が伝えられ、同時に地元紙ジュバ・モニター3 月 3 日付には、スーダン政府が背景にあるスーダン内の南側帰属者への蹂躙の悲劇が一面に記されていた。

「（北側の）政権党が武力勢力を使ってカルトウム地域のヌバ民族を攻撃し、2つの地域で 10 歳前後の女の子らや 150 人の女子大生を寄宿舎から連れ出し、強姦されそうになった2人が自殺未遂をした」

おぞましい出来事に胸が締め付けられる一方で、この記事の信ぴょう性は不明である。混乱の中で、両陣営のプロパガンダやデマ、中傷が飛び交っており、国連の各レポートでもモニターが難しい状況に苦慮しているようだ。

首都の光と影

混乱の中だが、日本の自衛隊は UNMISS（国連南スーダン共和国ミッション）への参加として今年初めから一次隊約 210 人、第二次隊約 330 人を派遣、すでに大型トラックや油圧ショベル、グレーダ、中型ドーザなどの重機を配備、武器として 9mm 拳銃、89 式小銃、5.56mm 機関銃などを配備し任務にあたっている。

前述の混乱は南北の境界線近くでの出来事に終始しており、北側による爆撃も首都ジュバには及ばない、とみられる。国際社会が後押しした独立と、国連による支援が只中にあって、北側が首都を攻撃するのは、国連はじめ国際社会が黙っていない、ことをスーダン政府も熟知している。

首都ジュバは穏やかな部族が多くを占める土地柄から、治安も比較的安定しているが、戦時下であるのは確かで、市場の写真を撮っていた私も静かに私服警察に連行され、殺風景な取り調べ室に招かれてしまった。（結局、持っていたカメラの記録に当日の大臣との会談写真が収められており、それを見た取り調べの男性は、はにかんだ顔で解放してくれた。）

昨今の南北間の火種は、南スーダンの石油資源である。南の石油は北側のパイプラインを通らねばならないが、最近はその北側のパイプラインから「石油が勝手に抜かれている」（南スーダン政府）を理由に供給を停止。南スーダンは隣国ウガンダなどと共有する姿勢を示し、南北間の対立はむしろ国家間の全面的な争いとして深刻化している。石油収入が9割以上を占める南スーダンにとって、石油供給の停止は、国の経済の根幹を揺るがす死活問題である。

震災の枠組みの援用

東日本大震災ではボランティアとして体を動かした人、遠くから支援をした人、さまざまな人が「支援」の山を築き上げた。そして、がれきを処理する人の群れを見ながら、何度もこう実感した。これを結集させると、どんなに強くしなやかな力＝民力となるであろう、と。

そして、しなやかに国際支援に援用できないかと考えた末の南スーダン支援だった。

国際支援というと、国際NGOが中心的な役割を果たしており、震災ボランティアに参加した「一般の人」にとって、それは空中戦のような印象があり、垣根が高い存在だった。言葉の壁、費用、そして時間。これらをクリアしなければ地上戦に持ち込めないが、「世界で最

も新しい国への支援」をキャッチコピーに、自衛隊派遣の話題性に乗り、そして世界に類を見ない「スポーツ人口」を運用しようとスタートしたのが「南スーダン共和国へのスポーツの力」プロジェクトである。

可能性と実現性

今回のプロジェクトは 2011 年 11 月に来日した南スーダンのベンジャミン情報相に直談判したのが始まりだった。3 月の事前調査と会談により、支援する種目は、サッカー、バレー、卓球、陸上となった。同時にジュバ中心部で、私が「飛び込み営業」をした冒頭のプリズン地区の子供と交流し、そして公営の孤児院である「オルファネージ・ハウス」を訪れ、2か所からの要望などを聞いた。

事前調査の結果、支援は「物資」と「コーチ派遣とアクティビティ」の2トラックに分かれるが、後者にはスポーツの楽しさを教え、実際に「楽しむ」プロセスが必要であり、競技（試合）を通じてのみ分かるものも多い。ここでは、現地に駐留する自衛隊員諸氏の余暇での参加を要請している。さらにスポーツアカデミーを設立してともに4年後のオリンピック出場を果たそうという夢もある。

進化したPKO

思えば、自衛隊が初めて国際連合平和維持活動（PKO）として海外派遣されたのは、カンボジア 1992 年。この時、痛ましくも国際ボランティアの中田厚仁さんが亡くなった。初めてのPKO派遣と中田さんの存在、そして自衛隊の拡大解釈に危機感を持つ方々により、メディアから多くの情報が提供される結果となった。この影響もあろう。カンボジアへの民間支援は活発になり、今でも多くの日本のNGOが現地支援で活躍している。学校建設や農村支援など多くのNGOや民間団体が動き、継続している状況を鑑みれば、これもPKO派遣の副産物ともいえなくもない。

その後、自衛隊はPKOの枠組みで、モザンビーク、東ティモール、ハイチなどと派遣してきたわけだが、自衛隊自身、「国際支援のやり方が分かってきた」（外務省関係者）というのが政府内の評価である。

この民間支援＋自衛隊というハイブリットされた活動がどれだけ広まるのかは未知数だが、政府の支援を、よりしなやかに運用するには、やはり民間支援との協力は不可欠であろう。

貧困の前の無力

ジュバの市場はカオスと呼ぶに相応しい色と匂いと喧騒を兼ね備えている。埃と食堂の炭から上がる煙と、生き物が熟れ過ぎた饐えた臭いが嗅覚を襲う。行きかう人の装い、そして顔立ちと体つきは全く同じではない。顔の大きさ、背の高さ、腕の長さや鼻孔の大きさ、その角度、入れ墨のありなしと髪の毛の縮れ方。まさにここは他部族国家。ポジュール、ディンカ、シュラク、ザンデ、バリ、マーレ、ヌエールなどが混在し、地元紙の社説には、その部族の素性が紛争の火種であると指摘し、米国のように「多民族国家」としてのアイデンティティー確立を呼びかけている。

そしてアフリカの多くに横たわる貧困。冒頭に紹介したプリズン地区は、まだ屋根のある場所に暮らす人たちだが、そのほかにも屋根のない場所で埃まみれになりながら、泥のように眠る大人や子供たちもいる。

支援しなければいけないところはまだまだある。私は半ば、途方にくれながらも、プロジェクトを前進させるために動き続けたい。

東北アジア平和構築インスティテュート（NARPI）について

2012 年 8 月、広島にて夏季実践トレーニング開催――

奥本京子（NPJ 理事、NARPI 運営委員）

すでに NPJ の皆様に、折に触れ報告して参りましたが、NARPI（Northeast Asia Regional Peacebuilding Institute, 東北アジア地域平和構築インスティテュート）とは、平和の実践的トレーニングを夏の２週間、集中的に提供するプロジェクトです。暴力と対立を平和的に解決できるよう、安心できる「場」において参加者のエンパワーメントをし、各自が持ち帰って、家族・共同体・町・国・より大きな地域全体に貢献することを目指しており、社会の平和的転換や和解のための、協調的な関係を築くことを大事にしています。

昨年度正式に始動し、2011 年 8 月、東北アジア・東南アジア・南アジア・北米 11 カ国から延べ 48 名の参加者を得て、韓国（ソウルと非武装地帯）にて開催することができました。

トレーニング自体は講義形式ではなく、ワークショップ形式を採用しています。あくまでも、ファシリテーターは共に学ぶことを促進する調整役です。平和・紛争学の基本に立ってトレーニングはファシリテートされ、参加者は、具体的な対立・紛争（コンフリクト）状況における実践的な方法論・技術を身に付けることを要求されます。トレーニングの後、参加者が具体的な「現場」に戻った時、これらの技術を活用して、状況を好転させることをしっかり意識してもらいます。

例えば、「平和の語り」のコースでは、他者の話を聴くことの意味を実感してもらうために、様々な工夫をします。「サークル・プロセス」という手法は、順々に語りたいこと・発言したいことを、安全で安心して述べる場を提供します。そこで、良く聴き、良く語り、良く関係性を深めていきます。そういったプロセスの中で、芸術・文化の持つ特別な力を認識し、それらのアプローチも平和ワークにおいては有効であることを学びます。

昨年度の参加者からは、「今後の生き方を大きく変える経験であった」「こんなに視野が広がった体験は人生で初めてであった」等の声があがりました。自身がアジアの市民であることを実感し、「今後の東北アジアのために仕事がしたい」と言ったロシアからの参加者もいました。プログラムの前半にあった、台湾と中国本土の参加者の間の大きな心理的・政治的「溝」は、一緒に生活し、非暴力介入・調停を実践する中で埋まっていきました。

今年は 2012 年 8 月 12～24 日、広島において、5 日間のトレーニングコースを２週間にわたって行います。コースの内容は、「対立と平和理論」「修復的正義」「平和教育」「歴史/文化の平和の語り」「トラウマヒーリング」「メディエーション」です。NARPI 日本チームが主体的に運営を担当し、広島の地において、東北アジアの文化的・歴史的文脈を尊重しながら行う予定です。詳細は、http://www.narpi.net をご覧ください。

この場を借りて NPJ の皆様にお願いです！

第一に、皆様の周りに、このプログラムについてお知らせください。そして、そのおかげで参加者を得ることができたら嬉しいですし、もしできないとしても、徐々に NARPI のことを大勢の人々に知ってもらうことは、東北アジア地域の平和創造のためには、とても重要だと考えています。

第二に、資金助成に、お力をお貸しください。

＊ 振込口座名義は「NARPI日本」です。

1) ゆうちょ銀行から（口座をお持ちの方は手数料無料）
金融機関：ゆうちょ銀行　記号：14190　番号：96574371

2) 他金融機関から（手数料をご負担ください）
金融機関：ゆうちょ銀行　店名：四一八（ヨンイチハチ）
店番：418　普通預金　口座番号：9657437

3) 振替口座をご利用（手数料ご負担ください）
口座番号：00990－8－257030
お問合せ: narpijapan@gmail.com

現在活躍している、または将来平和構築の分野で活躍する人々の多くは、学生、NGO職員、宗教リーダーや活動家で、十分な財政的資源がない人々です。財政的な支援なしでは、重要な平和実践トレーニングを、NARPI を通して受けることができません。そこで、皆様にNARPIへの財政的援助に貢献していただきたくお願いする次第です。皆様からお預かりする資金は、若い参加者のための奨学金となります。財政的支援は、NARPI の提供するトレーニングへの投資になります。将来のNPフィールドチームメンバーに成長する可能性も大いにあります！

どうぞ、私たちと共に、東北アジア平和構築実現に携わる者たちのエンパワーメントと成長に、ご支援ご協力ください。

暴力の副作用を防ごう

安藤　博

本土の沖縄化

「沖縄の本土復帰で日本が変わったと考えている」―元毎日新聞の記者、西山太吉氏は、「本土復帰で、沖縄はどう変わったか？」という問いを遮って、変わったのは沖縄ではなく本土の方だと答えています。沖縄の本土復帰 40 周年を機に行われたインタビュー（朝日新聞 2012/5/2 朝刊）でのこと。「米国は沖縄だけでなく、日本のすべての基地について、東アジアの主要な地域に自由に出動できる『自由使用』という権益を獲得した」、その起点は 1972 年 5 月 15 日の沖縄本土復帰だというのです。

日本政府主催の 40 周年記念行事とともに、「40 年経っても本土との格差は同じ、米軍基地の重圧は同じ」という、「沖縄」をいうときの定型化された言葉が新聞各紙揃い踏みとなっている中で、異色の一言でした。

よく知られているように、西山氏は 1972 年の返還時、日米政府間で交わされた密約を暴く報道を行いました。米国が負担すべき軍関係施設の原状回復費 400 万ドルを、日本側が密かに肩代わりすることを決めていたのです。

西山氏が行った情報公開訴訟で、東京地裁と東京高裁は密約の存在を認めました。しかし、日本政府(外務官僚)は「密約はない」と、いまなおシラを切り続けています。その意味では西山氏の闘いはまだ終わっていません。

分散化

この 40 年ではっきり変わったのは、北東アジア情勢、特に中国の著しい台頭です。その中国の軍事費が年率２桁で急増を続けてきたこと、その結果として中国の軍事力が 40 年前とは比べものにならないほどに増強されていること、その関連で、沖縄米軍基地の在り様にも微妙な変化が現れています。

この 4 月 27 日に日米政府が発表した在日米軍再編計画見直しの共同文書は、在日沖縄海兵隊 1 万 9000 人のうちの約半分 9000 人を、グアム、ハワイ、さらにオーストラリアにまで分散配置することを明らかにしています。

これは、反基地闘争の成果といったものではありません。中国の軍事力増強に対処して、リスクを分散しようとするものです。これによって、沖縄の基地の重圧は幾分軽減されるかもしれません。が、そのかたわら、懸案の普天間基地移転の目処が立たないまま、事実上固定化に向かっています。
「国外へ、少なくとも県外へ」と多くの人びとが長く厳しい闘いを続けてきた挙句の、いわば元の木阿弥です。

副作用

軍事基地の存在は、航空機落花事故、婦女暴行など、人びとの日々生活を脅かす暴力に加えて、地域社会を亀裂させる副作用もあります。

この 3 月初め沖縄本島北西岸からフェリーで 40 分ほどの島、伊江島に出かけたときのことです。非暴力平和活動の先駆者であり、「日

本のガンジー」とされる阿波根昌鴻の没後 10 年を記念する「学習会」に参加するためでしたが、島のあちこちで米軍基地用地として借り上げられている土地の売却を求める不動産業者の看板、「求む軍用地」が目につきました。子どもの学資などまとまったカネが必要となった島の地主から、米軍基地用に国に貸し出されている土地を買い取ろうというのです。つまり、米軍基地が半永久的に沖縄にあり続けるとみてその用地を買い取り、日本政府が米軍に基地を提供するために払っている借り上げ料を、元の地主に代わって得ようとするものです。

買取り広告の看板に、小さく「秘密厳守」と記されているのにぎくりとしました。米軍基地の「受け入れ」・「反対」、「用地売却」・「売却拒否」を巡ってこの小さな島に生じている隠微な亀裂が、「秘密厳守」という言葉で逆に赤裸々になっています。原発を受け入れるか否かを巡って、建設地の住民の間に生じているのと同様の亀裂です。

軍事基地や原発の暴力を跳ね返すには長くねばり強い闘いを続けねばなりませんが、その闘いの背後で、立場の違いによるいがみ合いによって地域・人間関係が分断されるようなことだけはないように。少なくとも外部から闘いの支援に乗り込んできた者が、その分断を助長することのないよう、こころしていかねばならないと思います。

南スーダンの平和憲法

君島東彦

平和憲法という言葉をよく耳にする。

管見によれば、この日本語の初出は、1946 年 3 月 7 日の朝日新聞である。この日の朝日新聞は第一面全部を使って、前日 3 月 6 日に幣原内閣が発表した「憲法改正草案要綱」―日本国憲法の原案―を掲載している。そして「劃期的な平和憲法」という見出しの社説を掲げている。平和憲法とは日本国憲法の代名詞である。

しかし同時に、平和憲法とは日本国憲法のことだけを指す言葉ではない。1791 年フランス憲法が「フランス国民は、征服を行なうことを目的とするいかなる戦争を企てることをも放棄し、かついかなる人民の自由に対してもその武力を決して行使しない」と規定したように、近現代の憲法が平和条項を持つのはふつうである。日本国憲法を含めて、世界には数多くの平和憲法が存在している。

先進国では、近代国家をつくるときに、政府が国内の武装勢力を平定して、政府が武力を独占した。そして政府の武力をどのように規制するかが、憲法の平和条項の重要な役割となった。それに対して、多くの途上国では、政府が武力を独占することができていない。数多くの武装勢力が並存しており、中央政府の統治が不十分である。このような場合、国内の平定、武装解除、そして法の支配の確立が喫緊の課題となる。内戦終結後、憲法が制定されるが、憲法制定自体が平和構築の重要な要素であるから、内戦終結後の憲法は、いわば途上国型の平和憲法といえるかもしれない。

世界で最も新しい国家、南スーダン共和国も憲法を制定した。全 201 条からなるごくオーソドックスな憲法であるが、この憲法制定自体が平和構築である。第 149 条が DDR（内戦時の兵士の武装解除、動員解除、再統合）の委員会の設置を規定しているところなど、まさに途上国型平和憲法というべきであろう。メアリー・カルドーがいうように、いまは国家間戦争よりも、内戦の時代である。このような「新しい戦争」に対応する「新しい平和」「新しい平和憲法」を考えることが求められている。

足尾からフクシマへ

大畑　豊

日本の公害の原点というとよくミナマタと言われますが、それ以前に明治に起きた足尾鉱毒事件があります。足尾銅山から流出する鉱毒により起こされ、被害は30万人以上と言われます。これに対し田中正造は操業停止を訴えましたが、明治政府は近代産業の育成、富国強兵に邁進し、対策を怠りました。多くの農地が汚染され、被害民たちは難民化し、遠くは北海道佐呂間町に移住し、昨年はその100周年の行事がありました。こうした人々の命や生活を犠牲にする近代文明に対し正造は「世界人類の多くは今や機械文明というものにかみ殺される。文明は汝を喰うの悪器たり」「真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」と訴え、政府に対しては「民を殺すは国家を殺すなり」「国民監督を怠れば、治者おのずから盗みをなす」と批難しました。鉱毒事件発生から120年経ちましたが鉱毒はいまだに流出しており、東日本大震災のときには堆積場が崩落し、渡良瀬川から環境基準のほぼ2倍の鉛が検出されました。

この鉱毒事件と今回の原発事故そしてミナマタもその構図はよく似ています。国策と企業が一体となり、被害は矮小化、不十分な被害実態の調査、被害者の分断と切捨てと差別、利益は我々が、害は子孫へ、です。今の政府も明治政府と同じく「棄民政策」を続けています。私たちは明治憲法下の「臣民」から現憲法になって「市民・主権者」となりましたが政府への隷従、盲従している姿に大差はないようです。今こそ、本当の意味での市民・主権者となり、声をあげ、このような政府の政策を転換させなくてはいけません。田中正造は明治の自由民権運動を先導し、憲法を最大限に活用し、民の間に分け入り運動を展開しました。

ガンジーもこのようなことを言っています。「文明の利器は便利な暮らしをもたらしたが、わたしたちに及ぼした損害も計り知れない。しかしどうして文明そのものを非難できるだろう。わたしたちが欲したから、生み出されたのだ。もしわたしたちが『いらない』と声をあげていたら、もっと正しい道を歩めただろう」「この文明は文明と呼ぶに値しない。しかし、近代文明にすっかり毒されている人々は、これが本物だと信じて疑わず、無意識のうちに近代文明を擁護しているのだ。眠って夢を見ている人は、夢の中で起こったことを現実だと思い込み、目が覚めて初めて間違いに気づく。近代文明という厄介を背負いこんでいる人は、ちょうどこの夢見る人と同じである」

電気や独占企業ということにも「電気はあまねく行き渡り、あちこちの家を照らし、さまざまな工業製品を生み出している。しかし電気はひとつの特定の電力会社からしかこない。考えてみよう。ひとつの企業が、電力という巨大な権力を握ることの恐ろしさを。電気や水、いずれは空気さえも、利権を得た企業からの供給に頼ることになったとしたら、それは極めて危険なことである。このような独占という暴力は、結局は破滅をもたらすことになる」

未来へ続けていける永続的な社会というものを構築していくうえで何が大切なのか、今真剣に考えなくてはなりません。今回の原発震災を経験し、多くの人々が目覚め、行動を起こしています。フクシマ以前も「原発いらない！」と声をあげてきた人は少なからずいましたが、全体に比べれば小さな声にしかなりませんでした。今こそ大きな声にして、子孫にツケを残さない、搾取のない文明、生き方を選びとり、構築していくときと思います。

2012 年度 NPJ活動方針

非暴力平和隊・日本（NPJ）の 2012 年度活動方針につき、2012/3/18 の理事会・総会で以下のように合意した。

即ち、2012 年度はNPJ発足 10 年となるのを機に「非暴力的方法により紛争地域の平和構築を支援する国際ＮＧＯ非暴力平和隊（Nonviolent Peaceforce）の日本グループとして活動」（ＮＰＪ規約第４条）するという原点を踏まえ、非暴力平和活動の活性化に改めて努力する。

具体的には「隊員の募集及び訓練を行うとともに、非暴力の思想及び運動を普及」(同)するという基本目的に即して、2012 年度は特に以下の活動を行う。

1. NP現地活動要員の訓練

紛争地で非暴力平和活動に当たる要員の訓練を、日本ないし東北アジアで行う。訓練要員の募集活動を通じて、軍事への傾斜を強めている日本において「非暴力の思想及び運動を普及」に寄与する。 #1

2. NP本部から送られてくる活動報告等の文書を、適宜翻訳してNPJメンバーに紹介する。翻訳者に一定の作業報酬を出す。 #2

3. 非暴力平和の重要文献の翻訳出版

ジーン・シャープの著作を候補とし、翻訳作業に備えて、その書をテキストとする勉強会を試みる。 #3

4. NP本部(ブラッセル)へのインターン派遣

ＮＰ本部の陣容がリストラ等で手薄になっていることを考えると、NPJなどのメンバー団体への情報提供が不十分であることをかこっていても事態は改善しないので、NPJの側から積極的に情報取得に努める。そのための一策として、有能な学生等をNP事務局にインターンとして派遣する。 #4

5. 南スーダンのNP活動見学に向かう学生への資金支援

スリランカ活動終了後の新たな活動地である南スーダンは、独立後内戦の危機をはらみ、武力紛争の予防が強く求められている。その現地状況を自ら見に行こうとする学生がいるのは喜ばしいことで、ある程度の金額を出して支援する。 #5

6. NPJニューズレター、ウェブサイト等で積極的にNPへの募金を呼びかけ、そのための＜専用口座＞を開設する。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

以下は、上記の活動を具体的に進めるための手立てとして、18 日の理事会・総会で提案されたこと、並びにその後に提案されたことである。

#1 君島代表が、NP現地活動要員の訓練を日本ないし東北アジアで行うことについてNP本部事務局に打診する。これを受けて、奥本理事がNARPI の訓練との連携につき、NARPIとの連絡を行う。安藤理事は、NPの現地活動訓練を受けた経験がある大島みどり、徳留由美両会員に、このNP訓練誘致につき、意見を求める。

#2 君島代表、安藤理事がNP活動に学生等若手を参加させていくことも目指して、翻訳作業を進める候補者さがしをする。

#3 君島代表が、翻訳出版の文献を選ぶ。それを受けて安藤理事が出版社をさがす。

#4 君島代表が派遣候補者をさがす。

#5 君島代表から「南スーダンのフィールドを訪れ、NPの活動を見てくる場合、NPJからたとえば 10 万円の補助金を出せないか」との提案があった。大橋理事等がこれに賛意を表している。

2012 年度予算について　　大橋祐治（理事）

2012 年度活動方針に従って予算を編成しました。と言っても、財源が限られているので、ほとんどの費目でこれまでとあまり違いはありませんが、NP設立 10 周年の節目として企画した非暴力平和活動の活性化のための幾つかの新たな活動について予算化しております。

以下に予算の概要をご説明し、2012 年度の活動目標の達成と予算の十分なる活用について皆さまのご理解を頂きたい所存です。

1. **経常収支：【収入】**

会員数に変更はありませんが、会費納入会員が減少しています。設立10周年の記念すべき年ですので昨年実績並みとしました。

昨年度、東日本大災害支援として全額を使用したカンパについても、今年はNPの支援（連携強化を含む）として同額を予算化しました。

2. **経常収支：【支出】**

設立10周年の新たな企画のための支出を勘案し、これまでの繰越剰余金約50万円を収入に上乗せし、次期繰越金ゼロで支出を計画しました。

① **発送配達費**：ニューズレター発行を6回から4回（2、5、8、11各月）とします。

② **給与手当**：会員名簿管理を含めNPJの一切の実務に対する謝儀を月3万円から2万円に減額しました。

③ **広報費**：NPJのウェブサイト管理費（10万円）の他に次の活動を企画・予算化しました。

・スリランカ・プロジェクト報告書（概要版）1,000 冊作製（2011 年終了したNPスリランカ活動へのNPJの貢献をB5判16頁に要約）

・日本でのNPトレーニング支援
NARPI（東北アジア地域平和構築インスティテュート）の第2回夏季平和トレーニングを広島で実施予定。NPが参加すれば一部費用を負担。

・ NPウェブ情報翻訳: NP活動のPRの為

④ **活動支援費**：

・NPJ会員による地域での活動を支援
・NP南スーダン活動視察支援
・ワークショップ支援
・ジーン・シャープ著書の翻訳支援
・その他活動費

⑤ **講師費用**：3回の講演会企画

⑥ **東日本大震災支援**：昨年度から繰越のプロジェクト。特別収支と合せ40万円を、継続プロジェクト2件と新規1件に支出。新規：福島ぽかぽかプロジェクト

⑦ **特別収支：【インターン派遣支援】**

NPブラッセル本部に日本からインターンを3カ月派遣して本部業務を支援し、さらにNPJとのコミュニケーションの向上を図る。人選を進め下期に派遣予定。

報告会「南スーダンにおける非暴力平和隊の活動―大学生が見たNGO活動の最前線」
日時：6月9日（土）15：00-17：00
予約不要・入場無料
会場：立命館大学 国際平和ミュージアム2階
報告：岡田二朗氏
コメント：君島東彦氏
司会：田嶋美花氏
主催：非暴力平和隊・日本、
立命館大学国際関係学部君島ゼミNPプロジェクト
連絡先：kimijima@ir.ritsumei.ac.jp

非暴力平和隊・日本　2012 年度予算 2012 年 5 月 4 日

	項目	2011 年度	2011 年度	2012 年度
		予算	実績	予算
1	参加費	45,000	23,300	20,000
2	会費	700,000	657,000	650,000
3	カンパ	500,000	464,505	460,000
4	雑収入	5,000	39,918	40,000
5	**経常収入計**	**1,250,000**	**1,184,723**	**1,170,000**
6	発送配達費	100,000	93,515	80,000
7	給料手当	360,000	360,000	240,000
8	事務所賃貸料	240,000	260,000	240,000
9	振込料	17,000	13,610	17,000
10	事務費	60,000	51,795	60,000
11	旅費交通費	90,000	146,510	90,000
12	通信費	29,000	25,540	29,000
13	雑費	8,000	2,520	8,000
14	広報費	110,000	106,050	280,000
	活動支援費	467,014	326,500	350,000
15	会場費		26,850	18,000
16	講師費用		25,000	50,000
17	予備費	100,000	0	41,381
18	東日本大震災支援	500,000	300,000	200,000
19	**経常支出計**	**2,081,014**	**1,737,890**	**1,703,381**
20	当期経常収支過不足	−831,014	−553,167	−533,381
21	前期繰越剰余	1,085,946	1,085,946	533,381
22	**今期経常繰越剰余金**	**254,932**	**532,779**	**0**
23	特別収支			
24	前記残高	3,477,310	3,477,310	3,177,310
25	今期支出			
	（東日本大震災支援）	500,000	300,000	200,000
	（インターン派遣支援）			700,000
	支出合計			
26	**特別収支残高**	**2,977,310**	**3,177,310**	**2,277,310**
27	未払金		21,956	0
28	**残高合計（22+26+27）**	**3,232,242**	**3,732,045**	**2,277,310**

Nonviolent Peaceforce

非暴力平和隊の理念と活動に賛同・支援してくださる個人および団体を会員として募集しています。入会のお申し込みは**郵便振替、銀行振込、非暴力平和隊・日本ウェブサイトの「入会申し込みフォーム」**をご利用下さいますようお願いいたします。

◎正会員（議決権あり）
- 一般個人：１万円
- 学生個人：３千円

＊ 団体は正会員にはなれません。

◎賛助会員（議決権なし）
- 一般個人：５千円（１口）
- 学生個人：２千円（１口）
- 団体　　：１万円（１口）

■ **郵便振替**：00110-0-462182　加入者名：**ＮＰＪ**
＊通信欄に会員の種類を（賛助会員の場合は口数も）ご明記ください。

■ **銀行振込**：**三井住友銀行 白山支店　普通 6622651**　口座名義：**NPJ 代表 大畑豊**
＊ 銀行振込をご利用の場合は、お手数ですが電話・ファックス・メールのいずれかを通じて入会希望の旨、ＮＰＪ事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

■ **ウェブサイトからのお申し込み**：http://np-japan.org/4_todo/todo.htm#member

夏季カンパのお願い

非暴力平和隊・日本（NPJ）共同代表　君島東彦、阿木幸男

初夏の候、みなさまお変わりなくお過ごしのことと存じます。

いつもご協力・ご支援ありがとうございます。みなさまからいただく会費と夏季・年末のカンパは、NPJの財源の両輪です。2012 年度予算および活動方針に書きましたとおり、2012 年度は、南スーダンにおけるNPプロジェクトにかかわる企画、学生インターンのブリュッセル事務所派遣、非暴力の理論家ジーン・シャープの翻訳等々、多彩な活動を予定しております。もちろん東京・駿河台の事務所を維持すること、ニューズレターを定期的に発行することもNPJの活動の基礎です。これらの活動を可能にするためにも、みなさまのカンパは必要不可欠です。どうぞご協力を賜わりますよう、お願い申し上げます。

正会員の方は一口 5,000 円程度（理事は原則二口以上）、賛助会員及び学生正会員の方は一口 1,000 円程度のご協力をお願いいたします。6 月末を一応の期限とさせていただきます。会費と同じ口座（上記）にお願いします。郵便振替用紙を同封いたしました。

なお、宛名ラベルに会費納入状況が記されております。ご確認いただき、期限を過ぎている方は、この機会に会費を納入していただけると幸いです。